

ロマン・ロランに届いた一通の日本語の手紙

高橋 純

パリのBNF（フランス国立図書館）の手稿保管部(Service des Manuscrits)に保管されているロマン・ロラン寄贈資料庫(Fonds Romain Rolland)の中に、高田博厚からロマン・ロランに宛てられた書簡14通が眠っていた。時系列的に見てそのうちの第2番目のものは、1931年6月30日の日付を持つ手紙である。これは、同年春に渡仏して間もない高田が、ふとしたことから「イタリア巡礼」をする機会に恵まれて、システィナ礼拝堂を訪れた時の感動をロマン・ロランに伝えたくて書かれた報告の手紙なのだが、そこには、高田の手でフランス語に訳されたある別人の手紙が同封されていたのだった。

その別人からの手紙ははじめ日本語で書かれ、直接ロマン・ロランの手元に届けられたが、当然ながらこのフランス人作家が読んで理解できるものではなかった。そこでロマン・ロランは、当時既にフランス滞在2年に及ぶ片山敏彦にこの手紙を送り、その内容を問い合わせたのだった。

「あなたの国の人々が私にあてて日本語の手紙をよこすことがときどきあります。同封のハガキにどんなことが書かれてあるのか私にお知らせくださいませんか？」(1931年4月4日付け、ロマン・ロランから片山敏彦宛ての手紙)¹

実は片山敏彦はこの後間もなくシベリア鉄道経由で帰国することが決まっていたので時間的余裕がなく、その手紙の内容をロマン・ロランに報告する役を高田に委ねて日本に向けて発ったのだった。その役割を高田はこの6月30日付けの手紙で果たすことになる。そして自らの書信の末尾にこう付け加えたのだった。

「ヒャクブ（という日本人）からの手紙の訳をお送りします。これはあなたが片山に訳すように依頼されたものです。彼は日本に帰る間際であったため、その翻訳を私に頼んで行ったのでした。私の旅行や私事等々のため長らく放置したままで申し訳ありませんでした。この手紙を訳すことはどうにも不可能です、ヒャクブという男は気違いとしか思われえないからです。」(1931年6月30日)

「ヒャクブ」なる日本人からのこの手紙は、3枚の罫線なしの便箋にフランス語訳され、高田自身の手紙に同封されていたものとして保管されていたのだが、日本語のオリジナルは失われている。恐らくは高田が、これをロマン・ロランの手元に戻しても意味はなかりと判断して、送り返さなかったのではないかと想像される。フランス語訳のほうは1枚目冒頭の上部に「高田によるヒャクブからの手紙の翻訳 - - - 1931年6月30日」とメモされており、その筆跡はロマン・ロランのものではない。長年彼の秘書役を果たしてきた妹のマドレーヌのものと思われる。この「翻訳不可能」な手紙のフランス語訳を読み、その内容を知るならば、高田が片山敏彦から任さ

れた任務を果たすべく如何に苦勞して訳したか、またその内容の突飛さから「ヒャクブ」を狂人と呼ばざるを得なかったかが思いやられるとともに、高田からロマン・ロランのもとに届いた情報が実に丁寧に保管されていた証しを得た思いがするのである。『ロマン・ロラン＝高田博厚往復書簡集』を構想する筆者としては、両者のやりとりの過程に挿入されていたこのような情報もすべからく把握しておかねばならないものであるから、ここに取えて再度日本語に移してみたいと思う。「ヒャクブ」が書いたオリジナルが存在しない今、高田がこれをフランス語に移した時に生じたであろう「原義」との隔たりと同程度の隔たりが、今度は高田のフランス語訳を再度日本語に移す時に生じたとしても、その内容の突飛さ（支離滅裂さ）からして、その隔たりの幅はそもそも確定しえない（つまり、高田によれば翻訳不可能な）ものであるから、ここではひとまず許容されるであろうと考える。

以下に示すのが、高田によるヒャクブの手紙のフランス語訳手稿と、筆者が試みたその日本語訳である。（高田がフランス語表記をした際の綴字のミスは無視していること、また文章の脈絡の不整合はヒャクブの原文に由来するものと理解して、できるだけ筆者の恣意を交えずに訳していることをお断りしておく。また、3枚におよぶこの手紙の文面で、最後に書き加えられたカッコ付きの5行が、訳者である高田のコメントである。）

Traduction de la lettre de Hyakubu

Tarō Kinoshita Takata - lettres du 30 juin 1931

Monsieur

Je vous écris la lettre pour la première fois. Je ne puis pas écrire l'anglais, donc je vous demande pardon que je vous parle en japonais. Moi Tagūji Hyakubu; j'étais devenu votre, "Jean Christoph," et j'ai existé jusqu'au 1731. Il y a déjà cinq ans depuis que mon père est mort. Après de la mort de mon père, j'ai lu un roman que j'ai emprunté d'un camarade de l'academie des beaux arts, et alors j'ai connu la vie passée. Dans ce roman il y a la famille de Cadmos de la mythologie grec, et Ino Otonoé, fils de Cadmos. Père est Inosaku (traducteur; nom japonais), Mère est Tsuga (traducteur; nom japonais), tante est Noa, etc.. En 11 ans ~~decouvrit~~ découvrit par un prophète (le responsable). En 18 ans j'étais tenté, sans ~~ma~~ ^{ma} propre conscience, et tombé dans la ~~hypnotisme~~ hypnotisme, heureusement et j'ai passé 2 ans dans la prison. En 30 ans j'ai connu que j'en étai dupée.

Né d'une étoile. "Monte Christ," d'Alexandre Dumas est issu de 28 des Articles des apôtres de la Bible.

Alexandre Dumas (né de 1802). J'suis né de 1902.

Victor Hugo (la même)

J'auteur de "Gōruri" (traducteur: chansons ~~anciennes~~ ^{populaires} ~~populaires~~ à théâtres d'ancien Japon) de l'époque Tokugawa. "Kanadehon-chūshingura" (traducteur: la plus fameuse chanson de "Gōruri") de Takeda-Izūmo (traducteur: nom de l'auteur.)

"Ōtoshi-Yuranasuke" (chingei) (traducteur: nom d'un drame, "Kabuki", de Japon.)

Découverte du premier satellite "Mimas". 1789, l'an de la prise de Bastille, le satellite se mouve en arriere. "Feb", "Fuē" (traducteur: flûte) est devenu l'auteur, Takeda.

(Hyakubu - Tazujī) "Tazu", est une étoile.

Takeda Igumo

Takeda Tarō (l'découvreur a sa responsabilité)

Pour prouver la prise de Bastille, le musée de Japon était pris par la pluie pendant cinq ans.

Moi, né de 1902. Au même an, en Angleterre, la prison de Newgate était détruit.

"Les Misérables", fait en 1925, de cinéma est Ciné-Roman de France.

Edifiée par "Jean Christoph".

"Sugawara-denju-tenarai-Kagami", (traducteur: nom de "Jōnsi") de Takeda Igumo.

"L'hiver" de Jean François Millet, au musée de Luxembourg, est le symbole de Sugawara Michizane (traducteur: nom d'un très ~~par~~ célèbre serviteur fidèle d'ancien Mikado)

Suga (l'arrière-plan) Wara (Hyaku) Michi (l'enfant) Sanzané, Hyakubu-Genzo, etc. Dessiner peintures pendant l'enfance. Mon père ~~pa~~ a fait visites de dévotion à un temple. Take. Hyaku.

Dans une lettre de Millet, donné à Sanguet en ~~1864~~ 1864, il a écrit, 'Mon Feido', Fuēdo a la signification de du prophète.

3

Vivre dans ~~les~~ livres depuis 30 ans. J'aime l'âge d'enfance.
Je n'aime pas ~~mon~~^{ma} adolescence, mais mon rêve est déjà
réalisé.

Je n'aime pas l'être humain, mais animaux. Maintenant
je travaille de toutes mes forces, Je désire vous écrire la lettre
encore une fois.

M. K. Matsumoto

53 rue de St. Cloud, Clamart (Seine)

M. Matsumoto est mon maître, et il ~~me~~ critique ~~souvent~~
souvent mes œuvres. Il est maintenant à Paris. Je vous prie
que vous le demandiez sur moi. Je me souhaite mon être, et
je vous souhaite une bonne santé.

Le 10 Mars.

Hyakubu Taguchi

Monsieur Romain Rolland.

(traducteur: j'ai cherché K. Matsumoto susdit à Clamart, mais
il était déjà parti pour Japon, donc il n'y a rien ~~que~~ que je puis
vous faire connaître quelque chose précise sur Hyakubu. ~~Mais~~
Cependant Hyakubu serait un exemple triste qui était devenu un
fon, je crois, dans la ~~prison~~ prison.)

拝啓

初めてあなたにお手紙さし上げます。私は英語で書くことができませんので、あなたに日本語でお話することをお許しください。私ことタズジ・ヒャクブはあなたの“ジャン・クリストフ”と化して、1931年まで生きてきました。私の父が亡くなってすでに5年が過ぎました。父の死後、美術をやっている仲間から借りた小説を読み、そこで我が前世を知りました。その小説の中には、ギリシャ神話のカドモスの一族、イーノー、アウトノエー、そしてカドモスの息子が出てきます。父はイノサク（訳者：日本名）、母はツガ（訳者：日本名）、叔母はノア、等々なのです。11歳で予言者（責任者）に見出されました。18歳で、何の自覚もなく、巧に悪の道に誘われて、牢で2年間を過ごす羽目に陥りました。30歳になって、自分が騙され欺かれていたのだと知りました。星から生まれたアレクサンドル・デュマの“モンテクリスト伯”は、聖書の使徒行伝第28章の出自なのです。

アレクサンドル・デュマ（1802年生まれ）。私は1902年生まれです。ヴィクトル・ユゴー（同じく）。

江戸時代の浄瑠璃（訳者：日本古来の演劇を伴う大衆歌謡）作者。

“仮名手本忠臣蔵”（訳者：最もよく知られた浄瑠璃歌謡）のタケダ・イズモ[竹田出雲]（訳者：作者名）。

“大星由良之助”（鎮西）（訳者：日本の歌舞伎の題目）。

1789年の土星の衛星ミマス発見は、バスチーユ監獄奪取の年であり、衛星は後方に動きます。

“フェーベ”すなわち“フエ”（訳者：笛）は作者竹田となったのです。



ヒャクブータズジ

“タズ”は星であります。

タケダ・イズモ[竹田出雲]

タケダ・タロウ（発見者には責任があります）

バスチーユ襲撃を証明すべく、日本の美術館は5年間降雨に見舞われました。

私は1902年生まれ。同年に英国のニーナー監獄は破壊されました。⁴

“レ・ミゼラブル”は1925年にフランスのシネ＝ロマン社で映画化されました。

“ジャン・クリストフ”によって打ち建てられました。

タケダ・イズモの“菅原伝授手習鑑”（訳者：浄瑠璃の題目）

リュクサンブール美術館のミレーの“冬”は菅原道真（訳者：古代帝の忠実にして有名な廷臣の名）を象徴しています。

スガ（背景）ワラ（ヒャク）ミチ（幼児）ザネ。ヒャクブ・ゲンゾウ等々。幼年時代を通じて絵を描きました。私の父は寺に願掛け参りをしました。タケ、ヒャク。

1864年にサンズィエに送った手紙の中で、ミレーは“親愛なるフェイダー”と書きましたが、フェイダーは予言者の意味を持つのです。

ロマン・ロランに届いた一通の日本語の手紙

30年来本の中で生きてきました。私は幼年時代が好きです。青春時代は好みませんが、私の夢は既に叶えられました。

私は人間が好きになれず、動物が好きです。今私は力の限り仕事をしています。もう一度あなたに手紙を書き送りたいと願っています。

K. マツモト氏

53 rue de St. Cloud, Clamart (Seine)

マツモト氏は私の師ではありますが、しょっちゅう私の作品を批判いたします。氏は現在パリに居ります。あなたから私のことをよろしく伝えてください。おのれの心の平安と併せ、あなた様のご健勝を祈念いたします。

3月10日

ヒャクブ・タズジ

ロマン・ロラン様

(訳者：私はK.マツモトなる人物をクラマールにて尋ね回ったのですが、彼は既に日本に旅立っていましたので、ヒャクブについてさらに正確なところをお教えしたくとも、何も分かりませんでした。さりながら、ヒャクブは、気が触れてしまったがゆえに牢につながれるという悲しい見本のようなものでありましょう。)

高田はフランス語への訳出の際に、外国人に知られていそうもない日本人の固有名詞や浄瑠璃の作品名などに、(訳者：・・・)というかたちの注記を補っているのです。これを読む者には、ギリシャ神話の「イーノー」から日本人名の「イノサク」、同じく神話の「アウトノエー」がヒャクブの叔母の「ノア」というように、音の類似が妄想上の同一視を引き起こしていることが分かる。また、土星の第九衛星「フェーベ」が「笛」を連想させ、さらに浄瑠璃作者竹田出雲に直結してしまうとなると、正常の域を越えた観念連合であるということになるだろう。

他方、文面には筆者ヒャクブの幅広い知識と教養を覗わせる文言が溢れてもいるのも事実である。日本の浄瑠璃や歌舞伎の有名作品を持ち出すかと思えば、フランスの高名作家の生年や、土星の第一衛星ミマス発見の年を言い当てている。画学生であるらしいから美術関連の知識があるのは当然だろうが、ジャン＝フランソワ・ミレーの特定の作品にコメントを加えるのみならず、ミレーの知人のサンスイエやフェイデーの名まで知っていて、それがヒャクブの妄想の世界に入り込んでいる(実際にはアルフレッド・サンスイエ[Alfred Sensier]はミレーの友人であり伝記作者、アルフレッド・フェイデー[Alfred Feydeau]は建築家でミレーの絵の注文主、と別々の異なる人物であり、ヒャクブが両者を同一人物として混同しているのは間違った理解なのだが、見方を変えれば、知識が豊富であることを明かしてもいるのだ)。

結局、精神分裂病（統合失調症）特有の関係妄想に満ちていると言わざるを得ないこの手紙で、ヒャクブは何を伝えたかったのだろうか。確かに支離滅裂で分裂気味の妄想の繰り言なのだが、手紙の最後に彼は、「おのれの心の平安と併せ、あなた様のご健勝を祈念いたします」（高田訳のフランス語は *Je me souhaite mon être, et je vous souhaite une bonne santé.*）と言っている。極東の日本から訪れた異国で挫折して心を病んだ一日本人画学生が、かつて名作の読書を通じて「ジャン・クリストフ」と空想的な同一化を果たした体験から、その主人公の生みの親（ロマン・ロラン）に、「おのれの心の平安」を希い、救いを求めて（日本語でであっても）この手紙を書かずにいらなかったのであろう、と想像されるのである。そんなヒャクブの心の嘆きと願いの一端は、彼の手紙の高田によるフランス語訳を通じて、『ジャン・クリストフ』の作者ロマン・ロランにも間違いなく届いていただろうと想像されるのである。

「ヒャクブ・タズジ」なる人物とこの手紙について、後日談は知られていない。

注

- 1 『ロマン・ロラン全集35』みすず書房、1962年、p. 110
- 2 日本語のオリジナルは存在しないため、歴史的に既知のものでない日本人名はカタカナで示す。
- 3 書体から見て、おそらくロマン・ロランの妹マドレーヌによる手書きの記入。
- 4 高田の筆記からはNengareあるいはNengahéと読めるのだが、英国にそうした名称の町は見当たらない。1902年はアイルランドがまだ英国の支配下にあったことから、範囲を広げて見ると、Nenagh（ニーナー：現アイルランド、北ティベラリー州都）の綴り間違いかと思えなくもない。ニーナーには刑務所があり、アイルランド独立運動が続いていた時代に、そのナショナリズムの高まりとともに注目を集めた場所でもあったことから、ヨーロッパではその名はよく知られていたようである。